

草双紙の諸相

—絵と文を読む江戸文芸—



【会期】

平成27年6月25日(木)～7月15日(水)

【会場】

鶴見大学図書館1階エントランス

【開館時間】

平日 8:50～20:00 土曜 8:50～18:00 日曜 閉館

講演会・ギャラリートーク

「草双紙のさまざま -形態・内容の両面から-」

【講師】神林尚子（本学文学部講師）

【日時】7月11日（土） 13:30～15:00

【会場】鶴見大学図書館地下1階ホール

申込不要・入場無料



はじめに

第 140 回貴重書展では、「草双紙の諸相 —— 絵と文を読む江戸文芸」と題して、鶴見大学図書館に所蔵される「草双紙」の数々を出展いたします。

「草双紙」とは、江戸時代に出版された、挿絵入りの小冊子を指す用語です。毎丁に挿絵を配し、余白を平仮名書きの本文で埋めるのが特徴で、江戸時代の様々な文芸の中でも、特に挿絵の比重が高いものと言えます。画文併存の形態は、現代の漫画に比せられることもあります。

こうした様式の淵源として、絵巻物や絵本・絵手本類、あるいは演劇書との関わりも指摘されています。ただし、草双紙の文章は単なる添え物ではなく、やはり一方の主役です。絵と文章、いずれが主従というよりも、画文が互いに響き合い、重なり合って一つの世界を作り上げていく点が、草双紙の何よりの魅力と言えるでしょう。

草双紙の形態は、刊行地域によって違いがみられます。江戸板の草双紙は、表紙の色を基準に「赤本」「黒本」「青本」「黄表紙」に分類されますが、こうした表紙の意匠の推移は、内容の変遷にもほぼ対応しています。大きさは、「中本」書型（縦 18cm、横 12cm 程）を原則としますが、近世の書籍の規格としては、これはあまり格式の高くない、実用書や通俗的な娯楽の本に用いられるサイズでした。多くは表紙に絵題簽（後には錦絵風摺付表紙）を配し、丁数（本文の紙数）は五丁を一冊とするのが定型ですが、十九世紀に入ると、数冊分をまとめて一冊に綴じる「合巻」の体裁が一般化します。相応じて内容にも変化がみられ、以後の草双紙は、敵討の筋や諸国名物、歌舞伎、古典の翻案など様々な要素を取り込んで、次第に長編化していくこととなりました。たとえば幕末・明治期の長編合巻『白縫譚』は、三十年以上にわたって書き継がれ、読まれ続けたロングセラーです。

一方、上方板の草双紙は、残存点数が少ないこともあり、全貌の把握はまだ研究の途上ですが、鶴見大学図書館には、稀覯本に属する上方板草双紙も所蔵されています。江戸板とはまた異なった風合いを持つ、上方板の貴重な遺例も、この機会にぜひご覧ください。

平仮名書きの絵入り本である草双紙は、「子ども向け」を建前としたさもない小冊子ですが、だからこそ「笑い」や諧謔を基調とした自在な表現、当世風俗の「うがち」を盛り込む器になりえたとも言えます。文章の機知や（駄）洒落、あるいは起伏にとんだ伝奇的物語を楽しみつつ、挿絵に仕掛けられた手掛かりから、文章では語られない伏線や典拠を読み解き、時に世相や当世風俗へのさりげない言及を見つれたりする楽しみは、草双紙ならではのと言えるでしょう。絵と文の交響する草双紙の世界を、どうぞゆっくりとご堪能ください。

最後になりましたが、貴重な資料の収集・保管に携わってこられた図書館関係者の方々、先生方に御礼を申し上げます。また、今回の展示について、様々な面で多大なご配慮を頂いた図書館の方々、展示に関してご助言を頂いた先生方に、心より感謝いたします。

日本文学科講師 神林 尚子

※ 解題の執筆は神林が担当いたしました。お気づきの点をご教示頂けましたら幸いです。

展示作品目録

I 初期草双紙のすがた —— 赤本・黒本・青本と上方板草双紙

- 1 『^{ふくじんめでたひ}福神目出度そろへ』 中本一冊 富川房信作画 [江戸板]
- 2 『^{わかんねづみかつせん}和漢鼠合戦』 半紙本一冊 [長谷川光信] 画 [上方板]
- 3 『^{たすみなさけのたんざく}新／板 忠純情短冊』 中本一冊（中巻存） [江戸板]
- 4 『^{さてもそののちしら がきんとき}扱茂其後白髪公時』
中本二巻二冊 柳川桂子作 鳥居清経画 安永六年（1777）刊

II 黄表紙の登場 —— 滑稽・諧謔と当世風俗

- 5 『^{むかしへはなしのといや}昔々 噺 問屋』
中本一冊 恋川好町作 北尾政美画 天明五年（1785）刊
- 6 『^{ぶんぶにどうまんごくをし}文武二道万石通』
中本三巻三冊 朋誠堂喜三次作 喜多川行麿画 天明八年（1788）刊
- 7 『^{きいたふうみゝがくもん}聞風耳学問』
中本三巻三冊 十返舎一九作 喜多川歌麿画 享和二年（1802）刊
- 8 『^{にんきう てのすぢ うらやさんみとをしざしき}人相／手紋 裡家算見通坐敷』
中本三巻三冊 山東京伝作 [北尾重政] 画 享和三年（1803）刊

III 洒落本との交響

- 9 『^{つう げん さうまがき}通／言 総籬』
小本一冊 山東京伝作 山東けいこう画 天明七年（1787）刊 江戸・蔦屋重三郎板
- 10 『^{こけいのさんしょう}古契三娼』
小本一冊 山東京伝作 山東けいこう画 天明七年（1787）刊 〈江戸・鶴屋喜右衛門板〉
- 11 『古契三娼』
小本一冊 山東京伝作 山東けいこう画 [天明七年（1787）] 刊 〈江戸・蔦屋重三郎板〉
- 12 『^{よしはらやうじ}吉原楊枝』
小本一冊 山東京伝作画 天明八年（1788）刊 江戸・蔦屋重三郎板
- 13 『^{けいせいかいしじゅうはつて}傾城買四十八手』
小本一冊 山東京伝作画 寛政二年（1790）初板（蔦屋重三郎板）。[寛政中期] 覆刻版

IV 「合巻」の時代 ―― 長編化と題材の広がり

- 14 『女達三日月於僊』
中本二編六卷二冊 山東京伝作 歌川豊国画 文化五年（1808）刊
- 15 『忍弾仇汐波』
中本二編六卷三冊 瀬川路考作 歌川国貞（三代豊国）画 文政六年（1823）刊
- 16 『露時雨駕籠之渡』
中本二編六卷二冊 十返舎一九作 北尾重政画 文政十一年（1828）刊

V 長編合巻の世界 ―― 古典考証と長編伝奇物語

- 17 『修紫田舎源氏』
中本三十八編百五十二巻（合十九冊） 柳亭種彦作 歌川国貞画
文政十二年（1815）～天保十三年（1842）刊
- 18 『根源実紫』
中本十編二十巻（合五冊）存 笠亭仙果作 三代歌川豊国・二代歌川国貞画
嘉永五年（1852）～安政四年（1857）刊
- 19 『柳亭翁著書目録』
写 一冊 柳亭仙果写（自筆） 天保五年（1834）～同十三年（1842）写
- 20 『白縫譚』
中本六十一編百二十二巻（合百一冊）存 柳下亭種員・笠亭仙果・流水亭種清作
歌川国貞・二代歌川国貞・歌川芳幾画 嘉永二年（1849）～明治四年（1871）刊

VI 「開国」・開港と草双紙 ―― 「万国」風俗への窓

- 21 『弥次北八／横浜久里毛』
中本二編六巻（合一冊） 岳亭春信作 歌川芳幾画 文久元年（1861）刊
- 22 『弥次北八／横浜久里毛』
中本二編六巻（合一冊） 岳亭春信作 歌川芳幾画 文久元年（1861）刊
- 23 『童絵解万国噺』三・四編
中本二巻四冊（合一冊） 仮名垣魯文作 歌川芳虎画 文久元年（1861）刊

【凡例】

- ・今回の展示資料は、近世の版本が中心であるため、装訂は全て袋綴、料紙は楮紙である。解題には、写本を除き、「袋綴・楮紙」の記述は省略した。
- ・原本に記載がなく、諸本や先行研究に拠って稿者が推論を記した箇所は〔 〕で示した。

解題

I 初期草双紙のすがた —— 赤本・黒本・青本と上方板草双紙

1 『福神目出度ふくじんめでたひそろへ』

中本一冊。上巻存。^{とみかわふきのぶ}富川房信作画。[江戸・鶴屋喜右衛門板。]

縦 17.6、横 13.0 糎。丹色無地表紙。題簽破損。柱題「めでたひそろへ」。丁付「一（～五）」。
全五丁。巻末（五丁裏）に「絵師 富川房信」の署名あり。

本書は、赤本に典型的な丹表紙を備えるが、この表紙が原装であるか否かはなお考証を要する。
表紙の題簽^{だいせん}（書名を記した短冊型の紙片）は破損しているものの、下端に残る文字から、延宝～享保期（十七世紀後半～十八世紀前半）を中心に赤小本や版画類を刊行した書肆・「藤田」版と推定される。ただし、本作の作者である富川房信の活動期は、やや下った宝暦～安永期が中心であり、原装が赤本体裁であったか否かは、慎重に判断する必要がある。なお、本文中に板元名の明記はないが、一才の匡郭上部に鶴屋喜右衛門の商標があり、鶴喜板と推定される。

内容としては、七福神を主人公とした「福神物」の一。弁財天に思いを寄せる毘沙門天は、弁財天と恋仲の恵比寿を嫉んで敵対、子分同士の合戦となる。毘沙門天が差し向けたムカデの軍勢に、恵比寿の配下の「大鯛ひれ蔵」たち魚類の一団は大敗、大黒天配下の鼠の助力を得て再度合戦を挑むが、ムカデ軍の計略の前に敗北を喫する。なお下巻では、大黒天の加勢や、狸々・浦島太郎らの仲裁により、毘沙門天・恵比寿が和睦するまでが語られる。

現存諸本としては、他に東洋文庫内岩崎文庫蔵本（上下巻存）が知られるのみである。『国書総目録』は、都立中央図書館加賀文庫蔵『福神目出度揃』と同一書目とするが、両者は全くの別本である（細谷敦仁「〈翻・複〉『福神目出度揃』について」『叢』13号、1990年7月）。

富川房信は、黒本青本時代を代表する画作者で、宝暦十年（1760）～安永六年（1777）頃まで、自画作の草双紙を刊行している（松原哲子「富川房信著作年表稿」『実践国文学』61号、2002年3月）。なお、房信は安永元年（1772）以降「吟雪」の号を用い始めるため、本作はそれ以前の刊行である可能性が高いが、確断は下し難い。

房信の著作中、本作を含めて「七福神」物の作品は多数にのぼる。房信が好んだ題材であるというのみならず、これは草双紙が本来備えていた祝儀性・縁起性とも関わるものと考えられよう。草双紙は初春の刊行を通例とし、正月の贈答品（お年玉）として用いられる祝儀物でもあった。「赤」が魔除けの色、祝祭的な色であることは、草双紙の本質と関わって重要な点である。

丹表紙（赤色表紙）の草双紙が絶えて久しい後までも、草双紙の総称として、「赤本」の称が用いられる例は間々見出される。式亭三馬が、文化八年（1811）刊の自作『其写絵劇場そのうつしえかぶきのおもかげ倂』等の巻末に「赤本のをはりと春のはじまりは いつもかはらずめでたし／＼」の一首を添えていることは、赤本を含めた草双紙の本質を端的に示すものであろう。後補ではあれ、本書が丹表紙を備えていることは、「草双紙」草創期についての認識が投影された結果とも推せられる。

2 『^{わかんねづみかつせん}和漢鼠合戦』

半紙本一冊。[長谷川光信]画。上方板。

縦 21.4、横 15.3 糎。紺色無地表紙。題簽、左肩子持杵「^{わかんねづみかつせん}和漢鼠合戦 全」。丁付（ノド）「一（～六）」。
見返白。本文は、一丁表から六丁表（後ろ見返に貼付）まで、五丁半を数える。

書名の通り、本作は日本の鼠が唐土に攻め寄せ、彼の地の鼠と一戦を構える様を描いたもの。甲冑や尻尾の形の相違などで彼我の鼠を描き分けるが、実際の合戦の描写については、平敦盛の討取りなど、源平合戦を下敷きにしている。錨を振りかざした平忠度を描いた画中の台詞として、「海老蔵」の名を出している点からは、『平家物語』について、歌舞伎を介して親しんでいた享受者層が想像されよう。

本作は、『近世子どもの絵本集 上方篇』（岩波書店、1985 年）に影印・翻刻が収載されている。同書の解題では、底本を含めて二点の所在を記すのみ（鶴見本は含まない）、『国書総目録』（日本古典籍総合目録）にも本書は立項されておらず、稀覯本の一に属す。

上方板の草双紙は、残存点数がきわめて少ない事情もあり、装訂・内容ともに詳細はなお不明な点が多い。書目の収集・整理を含めて、今後の研究の進展が俟たれる。書誌的特徴についても、体系的な定義は今後の課題ではあるが、以下、前掲『近世子どもの絵本集』の解題によって、その概要を述べる。上方板の草双紙は、初期には極小本や中本の書型も行われたが、江戸中期以後は半紙本型が主流となり、原則として一冊本（例外的に二冊物・三冊物も）で板行されている。紙数は六、七丁のものが多く、短いものは四丁、長いものは十二、三丁に及ぶなど、明確な基準は見られない。題簽は、左肩子持杵の短冊簽がほとんどであり、なおかつ漢字にふりがなを付すのが通例である。総じて、江戸板の草双紙（中本書型、五丁一冊を定型として絵題簽を備える）に対して、装訂面では独自の行き方を示している。鶴見大学蔵『和漢鼠合戦』は、上述の諸点とほぼ合致しており、上方板草双紙の標準的な体裁を示す一例と言えよう。

なお、本書には作者・絵師の署名は見出せないが、『近世子どもの絵本集』解題では、挿絵の画風から、宝暦・明和期に草双紙の挿絵や多数の絵本類を手がけた長谷川光信画と比定している。

3 『^{たゝすみなさけのたんざく}新／板 忠純情短冊』

中本一冊（中巻存）。作者・画工・刊年不明。江戸・鱗形屋孫兵衛板。

縦 18.1、横 13.1 糎。黒色無地表紙。左肩子持杵摺題簽「^{たゝすみなさけのたんざく}〈新／板〉忠純情短冊 中」。絵題簽「情のたんしやく 中」（鱗形屋孫兵衛商標）。柱題「情短冊」。各丁に落書・手彩色（朱筆）あり。後ろ見返墨筆書入「サ、ヤ鶴三郎本」。

丹表紙を備えた「赤本」に続いて、江戸板の草双紙の主流となるのが、黒色表紙の「黒本」と、これと並行して行われた「青本」である。なお、青色表紙はほどなく褪色して萌黄色（黄色）になったため、続いて現れる「黄表紙」と、外形的には変わらない（現に、同時代の用例では、黄表紙を指して「青本」と表記している例も多い）。

赤本時代の草双紙は、昔話を中心とした、「子ども向け」を建前とするものであったが、黒本・

青本は、演劇や軍記を取り入れて、ストーリー性を増していくことになる。赤本に比して本文の書入れが密になる一事からも、文章の比重が増していることが窺えよう。

本作の板元は、先掲の『福神目出度そろへ』の出版も手がけた鱗形屋孫兵衛である。鱗形屋は、江戸板草双紙の草創期から出版に関わった主要書肆の一つであるが、一方では浄瑠璃本や狂言絵尽（筋書きなどを綴った一種の演劇パンフレット）など、演劇書の出版も手がけている。黒本・青本が演劇との関わりを深めていく背景には、演劇書と板元を同じくしていた事情も与っていたものと考えられる。

なお、鶴見大学本には、各丁に落書が散見する。着衣などに彩色を加えるほか、髭や眉毛などの落書、更には当該の場面についての寸評めいた書入れもみられる（たとえば五丁裏、挿絵の余白には「さかすき（盃）をほしくてみている」とある）。こうした書入れは、本書の読者層について、また享受の様相についての示唆を含むものと言えよう。

鶴見大学本のほか、唯一の同一書目と目されるものとして、東北大学狩野文庫に所蔵される『〔情短冊〕』がある（題簽欠のため柱題で立項。目録記載参照、原本未見）。ただし、狩野文庫目録では、概書を「青本」に分類している。青本・黄表紙が後刷りの際に黒本体裁に改められる例は間々見られるため、本書も青本体裁が原装であった可能性も考えられるが、板行の経緯についてはなお考証を要する。

4 『^{さて も そののちしらがきんとき}扱茂其後白髪公時』

中本二巻二冊。^{やながわけいし}柳川桂子作。^{とりいきよつね}鳥居清経画。安永六年（1777）刊。江戸・鶴屋喜右衛門板。縦17.2、横12.5 糎。黒色無地表紙。上冊絵題簽「西 {しん／はん} ^{さて も そののちしらがきんとき}扱茂其後白髪公時 上」（鶴屋商標）。下冊題簽欠。柱題「しらか金時」。丁付「一（～十了）」。「桂子作／清経画」（十ウ）。全十丁。後印本。

源頼光四天王の一人とされた坂田金時の「後日」に、御家騒動の筋を絡めた作。大江山の入口、源頼光の鬼神退治の故地に、突如現れた大穴から芳しき煙が上がる奇事あり。源頼信の命をうけ、検分に出向いた平井昌俊の前に、「過ぎし万寿の頃姿を隠せし坂田金時」が出現。仙術を修めた金時は、昌俊の家臣が謀反の計を抱いていることを見抜き、昌俊一行に酒を勧める風を装って、悪心に毒酒を飲ませる。昌俊配下の忠義の武士の活躍もあり、家転覆の謀反は露頭、悪臣は切腹してめでたき春の栄えとなる。

頼光四天王の一人である坂田金時が、「白髪」の老体として現れるのみならず、仙術を修めて悪臣の企てを未然に防ぎ、鶴に乗って飛行するなど、仙人の如く描かれるのが構想の主軸をなす。平井昌俊の妻として登場する小式部内侍が、夫の帰りが遅いのを案じて「大江山いくのの道の遠ければ…」の歌を詠むなど、古歌の来由にこじつける条もある。随所に配された「むだ口」（たとえば、大穴から煙の上る奇瑞に「あな不審なことだ」と呟く男など）も笑いを誘う。

絵師の鳥居清経は、黒本青本時代を代表する画工の一人。本書の作者「桂子」（柳川桂子）のほか、米山鼎峨などの作者と組んだ作も間々見られる。

なお、文学史の用語としては、安永四年（1775）刊行の、^{こいかわはるまち}恋川春町作画『金々先生栄花夢』を嚆矢として、以後の草双紙を「黄表紙」と呼んでいる。『金々先生栄花夢』は、「子ども向け」を建前とする草双紙の形を借りながら、当世風俗や古典のパロディなどを随所に盛り込み、機知と諧謔に富んだ「大人」の文芸に一新してみせた。当時の戯作界の雄であった^{おおたなんぼ}大田南畝は、黄表紙評判記『菊寿草』（天明元年〈1781〉刊）の中で、「きん／＼先生といへる通人一変して、どうやらこうやら草双紙といかのぼりは、おとなの物になったるもおかし」と述べている。いわば、青本（草双紙）という形態自体をパロディ化してみせたのが、『金々先生栄花夢』であったとも言えよう。以後、春町が創始した作風に則って、機知と諧謔を旨とした草双紙が次々と刊行されていくことになる。

ただし、形態（表紙の色）を以てジャンルの呼称とする草双紙特有の分類法は、ここで些かの捻れに直面する。『金々先生栄花夢』の刊行後も、たとえば前掲の富川房信は、安永六年頃まで従来通りの「青本」の刊行を続けている。黒本体裁ながら、内容面で「黄表紙的」な作品も見られるほか、青本・黄表紙が後刷りの際黒色表紙を付けられる例もあったことは先述の通りである。赤本から黒本青本へ、そして黄表紙へ、という大まかな流れは認められるものの、個々の作品の位置づけは、やはり単純な問題ではない。

この『扱茂其後白髪公時』も、やはり同様の捻れを抱え込んでいる。『国書総目録』では、本作は「黄表紙」に分類されるが、鶴見大学本は黒色表紙を備えており、また東北大学狩野文庫本・中央大学図書館所蔵本も、「黒本」の体裁である。原装の考証を含めて、本作の分類については、なお検討の要があろう。ただし「白髪金時」の構想は、そうした分類上の穿鑿を越えて、諧謔に満ちたのどかな「笑い」を現出している。

II 黄表紙の登場 —— 滑稽・諧謔と当世風俗

5 『^{むかし／＼はなしのといや}昔々噺問屋』

中本一冊。^{すきまち}恋川好町作。^{きた おまさよし}北尾政美画。天明五年（1785）刊。江戸・蔦屋重三郎板。縦18.5、横12.7 糎。萌黄色無地表紙。原題簽欠、手書の絵題簽が備わる（版本臨模か）。外題「{さる／＼の／赤本} 昔々物語／（蔦屋重三郎商標）」。「一オにも蔦重商標あり。柱題なし。丁付「一・二・（二丁分欠）・五」。後印本。

本作の発端では、赤本作者となった猿の「さる丁」（「春町」の筆名をきかせるか）のもとに、「七福神の親玉、化け物仲間の先生」をはじめ、「金平」「乙姫」「花咲か爺」など、赤本時代の典型的な「^{おおだてもの}大立者」が押し寄せ、「初春の新版」に自分たちを登場させてくれるよう頼み込む。彼らの要望を受けて、「さる丁」が案じ出した新版が即ち本作の内容となる。

「鼠の嫁入り」を終えた鼠夫婦は、毎夜草双紙の類を食い散らしていたためか、桃太郎・金太郎の双子を授かる。離縁された母鼠を追って隠れ里を尋ねた桃太郎・金太郎兄弟は、土産にそれぞれ^{つづら}葛籠をもらうが、一方からは七福神、もう一方からは見越し入道はじめ化物連中が現れて、

化物退治が好きな金太郎は大喜びで連中を張りたおす。このほか、発端に示された話材以外にも、「猿の生き肝」や「団子どっこいしょ」など、昔話の話柄が随所に散りばめられ、書名の「嘶問屋」に違わぬ「吹き寄せ」の呈をなす。最後は揃って玉手箱を開け、長寿を寿ぐ「とにかく白髪がめでたい／＼」で幕となる。

同種の言葉や題材を寄せ集める作意は、「吹き寄せ」と呼ぶ戯作の手法でもあるが、ここでは、赤本の登場人物達をとりどり登場させて、「赤本」自体のパロディを試みている点が注目される。作者の恋川好町は、狂歌師として著名な鹿都部真顔^{しかつべまがお}の筆名。黄表紙の述作について『金々先生栄花夢』の画作者として名高い恋川春町に師事したため、この筆名を用いる。画工の北尾政美^{きたおまぎよし}（鋏形蕙斎^{がたけいさい}）は、黄表紙の挿絵のほか、一枚絵や絵本・絵手本の領域でも健筆を揮った、当代を代表する絵師の一人。

6 『文武二道万石通』

中本三巻三冊。朋誠堂喜三二^{ほうせいどうきさんじ}作。喜多川行曆^{きたがわゆきまる}画。天明八年（1788）刊。江戸・蔦屋重三郎板。縦 17.3、横 12.4 糎。萌黄色無地表紙。各冊絵題簽存。柱刻「万石 一（～十五）」。

作者の朋誠堂喜三二（狂歌名・手柄岡持^{てがらのおかもち}）は、秋田藩の留守居役という重職を務める一方で、狂歌や黄表紙に健筆を揮った、当時の戯作界の牽引者の一人。画工の「行曆」は、喜多川歌麿の弟子で、黄表紙にも多数の作品を残している。

いわゆる「寛政の改革」による文武奨励策を、黄表紙という器でいち早くうがってみせたのが本作である。設定は鎌倉時代に借りているが、着衣の紋所や模様などに、当時の大小名を細かく当て込んでいる。源頼朝（家斉）の命をうけた智臣・畠山重忠（定信）は、現今の大名の性根を知るため、富士の人穴を使って「文」「武」の士と「ぬらくら武士」を分類する（書名の「万石通」は、穀類を篩いわける「千石通」と、「万石以上の大小名」をかけたもの）。大多数を占める「ぬらくら武士」を文武いずれかに勧めるため、定信は計略をめぐらし、箱根七湯での遊興とその後始末の苦心などを経て、最後はのらくら武士に訓戒を施して結局となる。

本作の主眼は、改革政治への「批判」というより、田沼時代の武士たちの趣味生活を揶揄したものと考えられるが、モデル穿鑿^{せんさく}の興味とも相俟って、未曾有の話題作となった。版元の蔦屋重三郎は、幕府の譴責を憚って、衣服の紋等を削除・変更した再刻板、更に修訂を加えた第三版を出しているが、依然モデル穿鑿の関心が止まなかったことは、同時代の随筆などからも窺える。現実の政治をここまで穿った作意は、「子ども向け」を建前に、諧謔を事とした草双紙（黄表紙）だからこそとも言えようか。なお喜三二は、本作を最後に、以後黄表紙の筆を断った。

本学所蔵本は、着物の紋所等の考証から、上記の第三版と判断される。たとえば重忠の着衣は、再版では重忠の肩衣に定信の紋所である梅鉢紋^{うめばち}が彫られていたのが、三版では削除されるなど、実事との関わりをばかす配慮が見られる。ただし、鶴見本の上巻一ウ二オ（出陳部分）には、重忠の着衣に後から墨筆で梅鉢紋を書き入れた跡がみられ、本作が依然モデル穿鑿への関心を主として享受されていたことを物語っている。

7 『聞風耳学問』

中本三卷三冊。十返舎一九作。喜多川歌麿画。享和二年（1802）刊。江戸・西村屋与八板。縦16.8、横12.3 糎。萌黄色無地表紙。上・下冊題簽・絵題簽存。外題「聞風耳学問 上（下）」。中冊題簽破損。柱刻「みゝ 一（～十五）。紙数一五丁。中巻九丁破損。

地獄の閻魔王が、人間世界の様子を探るため、耳塚の霊を派遣するという趣向で、「壁に耳」「耳こすり」など、耳に縁ある諺や言い回しをとりどり寄せ集めた趣向が展開する。後半は作者一九自身が登場、人の話に耳を貸さない悪癖から、遊女をはじめ皆に耳を引っ張られ、「長耳国」同様の長耳になってようやく改心、元の耳に戻る筋が語られる。滑稽な言葉遊びや見立絵、作者を登場させた楽屋落ちの手法など、総じて分かりやすい笑いを基調とした作と言えよう。

先に見た『文武二道万石通』など、寛政の改革を当て込んだ黄表紙の刊行とその余波、そして後述する京伝・蔦重の「筆禍」を境に、黄表紙の作風は一つの画期を迎えた。従来指摘されるように、幕府の譴責をおそれた面もあるだろうが、更に大きな問題として、戯作の市場と読者層の変質をも想定すべきであろう。寛政期以前の黄表紙は、作者・読者のいずれも、教養の程度や知識、生活圏をある程度同じくしていた。いわば仲間内で共有される微細な「穿ち」が重視されたのに対し、書籍の広域的な流通によって、新たな読者層が開拓された結果、より分かりやすく、不特定多数に開かれた「笑い」が求められることとなる。機知と諧謔を主調に花開いた戯作の季節は、その人気と販路拡大の結果として、必然的に次の段階へ向かおうとしていたのである。

これに伴って、黄表紙の、そして戯作一般の作者も交代していく。この期の戯作を支えたのは、新たに登場してきた十返舎一九、式亭三馬、曲亭馬琴といった作者陣であった。また、例外的に寛政期以前から戯作界の中心で活躍を続ける山東京伝も、やはり作風の転換期を迎えていた。

8 『人相／手紋』裡家筭見通坐敷』

中本三卷三冊。山東京伝作。[北尾重政]画。享和三年（1803）刊。江戸・鶴屋喜右衛門板。縦16.9、横12.5 糎。萌黄色無地表紙。各冊絵題簽存。外題「人相／手紋 裡家筭見通坐敷 上（中・下）」。柱刻「見通 一（～十五）。作者表記「醒世老人 京伝戯作」（一五ウ）。

人相・手相八卦の形を借りながら、言葉遊びやこじつけ・見立てによって、様々な人間の類型を描き出した作。書名には、ほんの座興に過ぎない占いを扱ったという謙辞とともに、人間の心理・行動の種々相を見通しに穿ってみせた意も響かせるか。「いちがわる相」「やきもちをやき相」、「金があり相」や「こむ相」、はたまた「せすぢ」に「けんくはすぢ」など、いずれも洒落のめした諸類型の中に、身近な人間心理を穿ってみせる。『仮名手本忠臣蔵』五段目、与市兵衛殺し（山崎街道の場）をかすめた「此海道はぶつ相（物騒）」など、歌舞伎への言及も多い。

人相・手相などを含めた「観相学」（人相学）は、中国の道教思想に淵源するが、近世中期の心学流行などを受けて、宝暦期を中心に一大ブームを形成している（青山英正「古典知としての近世観相学」『アジア遊学 もう一つの古典知』勉誠出版、2012年7月）。現代の「占い」に遠くつながる「観相学」と文芸との関わりを考える上でも、本作は興味深い一証を提示している。

III 洒落本との交響

9 『^{つう}／^{げん}言^{きょうまがき}』 総籬

小本一冊。山東京伝作。山東けいこう（鶏告）画。天明七年（1787）刊。江戸・蔦屋重三郎板。縦15.8、横11.0 糎。茶色無地表紙。題簽、左肩子持杵（黄色地）「〔総〕籬 完」（上部破損）。柱題、「まがき（序～凡例、冒頭五丁）」、遊紙一丁を挟み、以下「まかき」。丁付、ノド。蔵書印、朱印「小汀文庫」「星野文庫」（一オ）、朱印「十林」（巻末）。

草双紙の展示なかばではあるが、ここでひとしきり、洒落本^{しやれぼん}の作例にも目を向けてみたい。

洒落本とは、遊里を扱った小冊子で、草双紙（中本）よりも一回り小さい、小本の形態で版行された。二～三十丁前後で完結する小冊で、多くは唐本を模した地味な茶色表紙を備え、挿絵も一冊に一葉あるかなし程度である。形態としては草双紙とは相違があるが、作者や画工、そして享受者層等の点でも、安永・天明期の黄表紙と重なる部分が大であった。

その顕著な一例が、ここに掲出する『^{つう}／^{げん}言^{きょうまがき}』 総籬』である。本作には、「^{あだきやあんじろう}仇気屋艶二郎」「^{きたり}北里喜之介^{きのすけ}」、^{しあん}幫間医者「^{しあん}わる井志庵」などの人物が登場するが、これは作者の京伝が天明五年（1785）に刊行した黄表紙『^{えどむまれうはきのかげやき}江戸生艶気樺焼』の登場人物をそのまま借りたものであった。作者の意図は、彼らの口を通じて、吉原の最近の噂や、遊里の遊びの諸相を描くことにあったと考えられるが、黄表紙と洒落本が、作中人物や作者・画工、ひいては享受者層としても交響しあうものであったことは、同時代の黄表紙を考える上で、やはり重要な点であろう。

なお、本書は大正・昭和期の時事評論家・蔵書家として知られる小汀利得^{おぼまとしえ}の旧蔵本である。

10 『^{こけいのさんしやう}古契三娼』

小本一冊。山東京伝作。山東けいこう画。天明七年（1787）刊。江戸・鶴屋喜右衛門板（初板）。縦15.7、横11.4 糎。茶色無地表紙。題簽、左肩子持杵（上部破損、補写）「〔古契〕三娼 全」。柱刻なし。丁付ノド。蔵書印、朱印「堀内文庫」（一オ）、朱色天狗形印（一オ、巻末）。「森武之助氏寄贈」（帙ラベル）。

11 『^{こけいのさんしやう}古契三娼』

小本一冊。[天明七年（1787）]刊。江戸・蔦屋重三郎板。縦16.0、横11.2 糎。緑色厚紙無地表紙。題簽、左肩子持杵「古契三娼 全」。柱刻なし。丁付ノド。表紙・後ろ表紙墨筆書入れ「十香書屋」。

洒落本『古契三娼』は、吉原・深川・品川の遊女上がりの三人の女性の会話を通して、江戸を代表する三箇所の遊里の特色を描き出した作。書名は中国の故事「^{こけいのさんしやう}虎溪三笑」（儒・仏・道の三賢者が一堂に会して語り合った逸話）をもじったもので、こうした典拠の踏まえ方にも、中国の遊里文学をそもそもの範に仰いだ洒落本の行き方が見出されよう。

三遊里のうち、特に深川と品川に重点を置いて、吉原と比較しながらその気風や言語、習俗の違いが活写されていく。三人が語る遊びの手練手管のエピソードも、各遊里の特色を窺わせて、

緻密な構成が認められる。

本学には、板元の異なる二種の版が所蔵されており、諸本比較の観点からも興味深い。初板は鶴屋喜右衛門板であったが、後に板木を譲り受けた蔦屋重三郎（蔦重）が、奥付を彫り変え、表紙を改めて出し直している。蔦重の後印本にも、奥付記載の相違によって二種が存在しているが、本学所蔵本はこのうちの第一種に分類される。

12 『吉原楊枝』

小本一冊。山東京伝作画。天明八年（1788）刊。江戸・蔦屋重三郎板。

縦 15.8、横 11.0 糎。茶色無地表紙。外題打付（左肩、墨筆）「山東庵京伝作／吉原楊枝」。

柱刻なし。丁付ノド。蔵書印、朱印「高」（一才）。後ろ表紙に黒印一顆（貸本屋印か）。

本作については、前年に刊行された洒落本『総籬』の凡例末にも既に刊行予告が見られ、早くから構想が練られていたことが窺える。

常に遊女の楊枝箱にある「吉原楊枝」の精が、吉原での遊びの秘伝を、三人の男に語って聞かせるのを、「磁石」の表徳を持つ遊客が立ち聞きするという趣向。奇抜な発想ながら、客と遊女それぞれの立場から遊所の遊びを論じた遊興論が展開される。吉原の内情に通じた「通人」作者・京伝の面目躍如たる一作と言えよう。

掲出箇所は、楊枝の精と男たちの会話を、遊客「表徳」が立ち聞きする場面を描いた口絵部分。本作の画工「北尾政演^{まきのぶ}」は、京伝の画号である。京伝は若くして北尾重政に浮世絵を学び、自画作を含めて、黄表紙・洒落本の挿絵も多く手がけている。

13 『傾城買四十八手』

小本一冊。山東京伝作画。寛政二年（1790）初板（蔦屋重三郎板）。[寛政中期]覆刻版。

縦 15.8、横 10.5 糎。茶色無地表紙。題簽欠。柱刻なし。丁付ノド。

蔵書印、朱印「きらのほん」、黒印「田中」「梅澤」。「尾嘉」（一才）。雲英末雄氏旧蔵書。

山東京伝の洒落本の中でも、特に評価の高い作の一つ。「しつぱりとした手」「しんの手」など、遊客・遊女の諸タイプを掲出して、座敷や閨房での会話を綴っていくが、会話を通じて人間心理を描写する筆の冴えは、洒落本という形式の到達点の一つの達成と言えよう。

本書の刊行事情はやや複雑である。初板・初印を明確に示す奥付を持つ本は見られず、多くは奥付を欠くか、蔦重板の後印本に特徴的な奥付を備えている。いわゆる「寛政の改革」の一環として、洒落本の禁令がやがて出されようとする情勢に鑑みての配慮があったかとも想像される。なお、翌寛政三年に刊行された京伝作・蔦重板の洒落本三作は、浮薄の作として譴責を蒙り、京伝と蔦重は手鎖・罰金の処罰を受けている。以後京伝は、事実上洒落本の筆を断った。

本書には、初板とみられる寛政二年の蔦重板の他に、二種の覆刻版^{ふつこくばん}（覆せ彫り）が存在する。本文や口絵、丁付等の比較から、それぞれ覆刻版 A・B に分類され、B 種については更に（甲）

〈乙〉の二種に分けられるが、このうち鶴見大学本は覆刻版 B の甲種本に類する（『山東京伝全集 第 18 巻』解題参照）。A・B とともに京伝筆禍後の偽板にあたるもので、いずれも初板によって別々に覆刻されたものと判断される。洒落本の新板は、寛政三年以降数年間の断絶の後、文化年間に再び作例が見られるが、天明期の作風とは自ずから大きく相違している。

IV 「合巻」の時代 —— 長編化と題材の広がり

14 『女達三日月於僊』

中本二編六巻二冊（合一冊）。山東京伝作。歌川豊国画。文化五年（1808）刊。江戸・丸屋文右衛門板。

縦 18.0、横 12.5 糎。萌黄色無地表紙。絵題簽「女達三日月於僊」。柱刻「おせん 壱（～三十）」。
山東京伝自序。表紙墨筆書入れ「此ぬしつう」。後ろ表紙墨筆書入れ「三ヶ月の居給ふ／かたや時鳥／しうか」「此ぬし／つう」。

江戸板の草双紙は、早期から五丁（現代の感覚で言えば 10 頁）一冊の単位を定型としていたが、文化初年（十九世紀初頭）から、数冊分をまとめて一冊に綴じる「合巻」の形態が行われはじめる。黄表紙が基本的に上・中・下の三冊で完結していたのに対し、複数冊を合冊する形態の導入は、必然的に内容面の変化をも将来することとなった。

長編化への対応は、特に初期の作例では、「敵討」を主筋とすることによっていた。事件の発端から、敵の行方を追っての艱難辛苦、晴れて本懐を遂げて大団円、という流れは、途中の脚色如何によって、長短自在に対応できる利点があった。言い換えれば、複数の筋を「敵討」という一本の糸で束ねられるという便利さの故に、この形式は合巻の常道となっていく。

本作も、大力の女伊達「三日月お仙」を主人公としつつ、やはり敵討の筋を中心として構成されている。書名にも冠された女伊達「三日月お仙」は、安永五年五月から江戸・堺町新道で興行して評判を呼んだ大力女「柳川ともよ」をイメージし、それに歌舞伎の毒婦「三日月於仙」を重ねたものと推される。

掲出箇所は、大力女「三日月お仙」の勇姿を描いた口絵の部分。細部の意匠にまで意を用いた口絵を巻頭に配し、登場人物の紹介と作品の大綱を伝える工夫は、同時代の読本、ひいては読本が範とした中国の白話小説の体裁を模している。読本の影響は、装訂のみならず内容面にも及ぶものであった。以後、合巻は次第に伝奇的な物語性を重視し、長編化の傾向を強めていく。

15 『忍弾仇沙汰』

中本二編六巻三冊。瀬川路考作。歌川国貞画。文政六年（1823）刊。江戸・西宮新六板。

縦 17.9、横 12.2 糎。摺付表紙。外題「くすまの浦のぬれ事／にのくち村のしうたん」しのびこま仇な沙汰」。上冊巻末、式亭三馬薬品目録一丁。奥目録、西宮新六新板書目（各冊）。虫損（補修）。

草双紙は、赤本・黒本時代から既に演劇的な素材を取り入れていたが、合巻の時代を迎えて、出版部数の増大と内容の大衆化に伴い、歌舞伎とより深く結びついていく。こうした流れを背景に登場したのが、歌舞伎役者を「作者」と銘打った、役者名義の合巻であった。

文化後期から文政期を中心に、七代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎、七代目岩井半四郎など、当時の人気役者を「作者」とした合巻が次々と刊行されていく。役者合巻は、現存の作例だけでも約八十点にのぼるが、実際は代作者の筆になることは、同時代からほぼ公然と知られていた。今日のタレント本とは異なって、役者名義合巻では代作者の名が序者・校合者^{きょうごう}といった形で明示されることも多く、役者自身が序文等で代作者の存在に言及した例もある。実際は代作者（多くは戯作者）たちの筆になることも承知の上で、最良役者の自著に係るという結構を楽しんでいたものと考えられる（佐藤悟校訂『役者合巻集』〈国書刊行会、1990年〉解題）。

本作は、五代目瀬川菊之丞^{きくのじょう}（俳名「路考」）名義の合巻として最初の作例。序文の代わりに、歌舞伎作者・桜田治助^{さくらだ じすけ}からの書簡（本作の草稿を読んだの讃辞）が配されるのも、役者・歌舞伎作者の関与を強調する一法であろう。なお、本作の代作者として、木村黙老『戯作者考補遺』は、板元の西宮新六（筆名・夷福亭宮守）を想定している。

外題角書に示されるように、本作は、須磨に配流の身となった在原行平と須磨の海女・松風の悲恋を描いた「汐汲」（『今様須磨の写絵』など）と、『冥途の飛脚』などで知られた梅川・忠兵衛の新口村への道行を主な題材とする。近世の歌舞伎興行の形態として、最初に歴史・説話等に取材したもの（一番目物）、次いで現代を舞台にしたもの（二番目物）を表裏の形で上演するのが通例であったが、本作の構成もそれに倣ったものと考えられる。なお、本作の登場人物は役者似顔絵で描かれているが、これは役者名義合巻に限らず、この期の合巻の常道であった。

16 『露時雨駕籠之渡』

中本二編六巻二冊。十返舎一九作。北尾重政画。文政十一年（1828）刊。江戸・山本平吉板。縦17.9、横12.2 糎。摺付表紙。巻末一丁欠。柱刻「駕のわたし 一（～廿九）」。摺刷良、水濡有。

文化文政期の合巻には、様々な要素を取り入れようとする模索期の観も認められる。敵討、歌舞伎といった主要な要素に加えて、諸国の名所・名物を扱った作も散見する。飛騨国神通川^{じんつうがわ}の名所「駕の渡し」を扱った本作も、そうした流れの一に数えられよう。

本作の作者は、滑稽本『道中膝栗毛（東海道中膝栗毛）』で盛名を誇った十返舎一九である。『道中膝栗毛』の初編は享和二年（1802）の刊行であったが、続編を含めて以後十二編（文政五年刊）までこれを書きつぐほか、『金草鞋』（文化十年（1813）～天保五年（1834）刊）など、諸国道中記ものを陸続と刊行している。本作の成立については、自序の記述が参考になろう。

…予一とせこの所^{ところ}〈引用者注・飛騨国神通川流域〉を通行し 樵夫^{しやうふ}の家に憩ひて^{いへ} 渋茶^{しぶちや}すゝりながら聞る事あり 山中卑俗^{さんちゆうひぞく}の俚語ながらも 其旨趣玄妙^{そのししゆげんめう}にして近來流行^{ちかごろりうかう}の合巻^{がう} 絵草紙^{えくさし}に其おもむき彷彿^{きもに}たり 仍て紀行^{よつ きこう}の筆^{ふで}に任せ拾ひ書^{まか ひろ かき}しかへりしを編りあはせて 取敢ず^{とりあへ}この表題^{かうふ}を蒙らしむ…

（自序〈一才〉。引用に際して適宜空白を設けた）

即ち、本作の構想として、一九自身が実際に彼の地に赴いた際に見聞きした、実事譚に基づくことが標榜される。真偽の程はさておくにせよ、諸国の名所・逸事への興味を前面に打ち出した作であることは注目されよう。なお、神通川の「駕の渡し」は、「^{がんせきたか}巖石高く^{そばだち}崎たる^{りやうがん}兩岸より^{ふだ}藤綱をわたしこれに^き木を^{まげたわめ}曲撓たる^{かたち}駕の形のごときを^{ひと}さげて^{のせ}人を^{つな}乗せ綱をひきわたす」(自序)もので、表紙のほか、本文の挿絵でも大きく扱われている(掲出箇所を参照)。こうした目慣れぬ風物への興味も、本作を含む諸国名所ものの諸作を支えたものと考えられる。

V 長編合巻の世界 ― 古典考証と長編伝奇物語

17 『^{にせむらさきいなかげんじ}修紫田舎源氏』

中本三十八編百五十二巻。^{りゅうていたねひこ}柳亭種彦作。^{くにさだ}歌川国貞画。文政十二年(1815)～天保十三年(1842)刊。江戸・鶴屋喜右衛門板。

摺付表紙。鶴見大学本は二編毎に合綴し、保護表紙を付す。保存箱あり。

『源氏物語』の後代への影響は枚挙に暇がないが、近世における翻案の例として筆頭にあげられる作品の一つがこの『修紫田舎源氏』である。原典の緻密な考証と翻案の作意は、美しい挿絵と相俟って好評を博し、三十八編を数える長編となった。

本作は、『源氏物語』を当世の物語(「今様源氏」)として翻案したもので、光源氏をモデルとする美貌の貴公子・^{あしかがみつうじ}足利光氏の活躍を描いている。特に前半の数巻は、御家騒動を軸とした推理小説のような構成をとっており、ミステリーのような謎解きの妙味も楽しめる。たとえば「^{うつせみ}空蟬」の巻を翻案した「^{からぎぬ}空衣」の挿話など(掲出図版)、緻密な考証に基づいた翻案は、考証家としても知られる種彦の技量を示すものであろう。美しい挿絵の効果を十分に生かした画面構成にも、ジャンルの特質が遺憾なく発揮され、草双紙という文芸の一つの到達点を示している。

金砂子を散らした摺付表紙など、装訂の華麗さも本作の魅力の一つであるが、折からの天保の改革にて、美しい造本が統制の槍玉に挙げられ、絶板処分を受けている。作者種彦の体調の悪化もあり、三十八編を最後に本作は途絶、間もなく種彦は世を去った。

なお、本作をもとにした浮世絵も数多く出版されており、これを総称して「源氏絵」と総称される。『修紫田舎源氏』の場面に基づいた図様のほか、いわば光氏を狂言廻しとして、各地の名所・歌枕や生活風俗などを描いたものも多い。なお、光氏の髪形は、髷の形が海老に似た独特のもので、これが『修紫田舎源氏』およびその影響作を特徴づける指標ともなっている。

※参考出品・^{あづまのはなげん[じ]すごろく}『東京之花源氏双六』 (壁面展示)

一舗。一孟^{よしとら}斎芳虎画。刊年不明(明治板か)。江戸・万屋孫兵衛板。多色摺り。

石山寺で『源氏物語』の想を練る紫式部を描いたコマを「ふり出し」とした飛び双六(廻り双六)に対し、賽子を投げて出た目と同じ数字のコマに飛ぶ双六。「上り」を含め全十四コマ、各図に『源氏物語』の巻名を二帖分ずつ記す。『修紫田舎源氏』の影響作である「源氏絵」の一。

18 『根源実紫』

中本十編二十卷五冊存。^{りゅうていせんか}笠亭仙果作。三代歌川豊国画（初・二編）、二代歌川国貞画（三編～十編）。嘉永五年（1852）～安政四年（1857）刊。江戸・佐野屋喜兵衛板。

縦 17.6、横 11. 9 糎。摺付表紙。全十七編六十八巻のうち、十編二十巻存。

各編の袋^{ふくろ}を覆い表紙に配し、二編毎合冊して改装。各冊奥目録に佐野屋喜兵衛板の広告あり。

袋などにみられる「紫式部一代記」の惹句の通り、本作は『源氏物語』の作者である紫式部を主人公として、その生涯を描いた異色作。作者の笠亭仙果は、『修紫田舎源氏』の作で知られる柳亭種彦に師事し、後に二世種彦の号を継いでいる。紫式部を主人公とする構想には、師の人氣作を引き継ぐ意図も認められようか。

ただし、実際の内容としては、紫式部の実人生を主軸とするというよりも、花山院の一代記や、藤原伊周^{これちか}の流罪など、王朝の歴史絵巻の観がある。とりわけ盗賊袴垂保輔^{はかまだれやすすけ}は主要人物として活躍しており、史実に則するというよりも、合巻・歌舞伎の白浪物^{しらなみの}に類する娯楽性に傾いた作と言える。こうした点は、作者の仙果自身も自覚するところであった。初編の自序において、

…似て非なる物ならでは人の悦^ひび看^み給はず^{うそ おもしろ} 虚は面白く実^{じつ}は興^{けう}浅し……十に五は推^{とを}量^{いづ}の
憶^{おく}度^どをもてしくみ^げたれば外^げ題^{だい}には 実^{じつ}と喚^{よべ}ども実^{まこと}らしき虚^{うそ}なれば猶^{なほ}その興^{けう}は深^{ふか}からず…

と慨嘆しているのは、あながち韜晦^{とうかい}ばかりとも言われまい。

作中の逸話の典拠としては、『栄花物語』や『日本紀略』、また『沙石集』などの説話類をも参看している。自序では無学を度々口にしてはいるが、こうした古典籍の援用は、若い日に国学・歌道を志した仙果ならではの言い得よう。

天保の改革以後、本屋仲間の一時的解体を経て、本屋仲間組織は新たな編成期を迎えていた。嘉永期以降の合巻の動向については、今後の研究に期すところも多いが、一つの特徴として、前代以上に顕著な長編化の傾向が挙げられる。本作についても、「当世は幾編^{たうせい}も長く続^{いくへん}くを主とすれば…」（三編序）と、長編化への要請に苦慮する様が語られる。袴垂保輔^{なつぽなだろぼう}という「立者強盗」を「かつぎ出した」（同）のも、そうした必要に迫られての作意と見られよう。こうした動向は、やがて幕末・明治初期にかけて、『白縫譚^{しらぬいものがたり}』などの大長編合巻を生み出すことになる。

19 『柳亭翁著書目録』

袋綴一冊。天保五年（1834）写。柳亭仙果自筆。後人補筆あり。

縦 12.4、横 9.1 糎。紺色無地表紙。題簽、左肩「柳亭翁著書目録 上」（墨書）。紙数一八丁。

朱長方印「このぬしせんくわ」、朱印「玉晁」（二顆）。

柳亭種彦の弟子にあたる笠亭仙果が、師の著作を編年体の目録としたもの。本書については、^{つと}夙に本学日本文学科の高田信敬教授による解題が備わる（図録『藝林拾葉』所収、鶴見大学図書館発行、1986年）。以下、高田氏の所説の引用をもって本書の解題としたい。

盛名一時に鳴った『修紫田舎源氏』によって、また精密な考証『還魂紙料』によって知られる柳亭種彦(1783～1842)の著作を、その弟子で後に二世種彦を継いだ笠亭仙果(1804～1868)が年次別に掲げる形式で一冊となし、自らの蔵としておいたもので、当時の姿のままに伝存。上巻は種彦六〇歳の天保一三年(1842)で区切りとし、それ以降の分を下巻に収める予定であったが、不幸、天保の改革による『修紫田舎源氏』版木没収後、間もなく種彦は死去した。これが奇しくも天保一三年であったから、仙果が上巻を六〇歳に限ったことは、あたかも識をなした如くである。これを編んだ天保五年(1834)は、仙果が種彦の紋に入って著述を重ね、いよいよ独立しようとする頃であった。…見返、四周双辺(縦9.9、横7.0 糎)。「天保五年庚午七月集／柳亭翁著書目録 乾／笠亭仙果蔵本」。外題とも本文と同筆。本文は每半葉四周単辺(縦10.1、横7.5 糎)六行二段に界を引き、これを一年分にあてる。天保五年七月付の漢文序あり、師種彦の文業をたたえ、多数の著述の検索に便ならしめんがために、この冊を編んだと記す。料紙、楮。紙数一八丁。うち一四丁分文化四年(1807)～天保五年までが成立当初のもので、以下天保一三年に至る部分は別筆と覚しき書きつぎ、最終丁に「七月十九日嗚呼悲哉／芳覚院勇譽心居士／ちる物に定る秋の柳哉／吾も秋六十帖をかきりかな」と戒名・辞世の句を記す。朱による書入は、門人の著述を当該年に録したもの。洒落本『山嵐』、考証『用捨箱』などの記載を欠き、また実際に著作年次とずれることもあるが、『女目鬢』『正本製両面鏡』などの一枚刷の如き世に知られぬ作が著録されるのはおもしろい。…

なお、仙果の蔵書印「このぬしせんくわ」の他、見返の朱印二顆は^{こでらぎよくちやう}小寺玉晃の蔵書印(高田氏御示教)。名古屋の蔵書家・考証家である小寺玉晃が本書を蔵していたことも銘記されよう。

20 『^{しらぬひものがたり}白縫譚』

中本六十一編百一冊存。柳下亭^{たねかず}種員・笠亭仙果・流水亭^{たねきよ}種清作。歌川国貞・二代歌川国貞・歌川芳幾・豊原国周・守川周重・楊洲^{ちかしげ}周延画。嘉永二年(1849)～明治四年(1871)刊。藤岡屋慶次郎・柳下亭・広岡屋幸助・丸屋鉄次郎板。

各冊、縦17.7、横11.8 糎程度。摺付表紙。十四編までは四冊分を合冊。上下冊の表紙を見開きに配し、袋(書袋)を覆い表紙として改装。十五編以下は、各編袋入りにて現存。

合巻『白縫譚』は、幕末・明治期にかけて、三十年以上にわたって書き継がれた大長編である。板本としては七十一編、活字翻刻のみ残るものを加えれば九十編まで続いて完結、合巻としては最長編の作品と言える。

刊行が長期にわたった結果、本作の作者・画工・板元は数次にわたって交代している。作者の死去などの事情により、弟子などが遺稿を補筆し、あるいは続編を嗣作する様態は、長編化が進んだこの時期の合巻ならではと言えよう。執筆・刊行事情の詳細については、『白縫譚』全編の影印・翻刻(国書刊行会、2006年)付載の解題(佐藤至子氏執筆)を参照されたい。

その長さに相応じて、内容の点でも、本作はきわめてスケールの大きな伝奇ロマンである。舞台を戦国時代の九州に設定し、黒田家の御家騒動や天草の乱、その他各国の地誌や浮世草子など、様々な先行作品を取り込んでいる。何より、本作の最大の魅力は、主人公「若菜姫」の造型であろう。豊後国^{うすき}杵城主大友宗隣の遺児として、御家再興と九州平定を誓う美貌の若菜姫は、蜘蛛の妖術を自在に操り、あるいは男装して敵方に潜入するなど、変幻自在の活躍を示す。

怪奇と艶情に彩られた美姫・若菜姫は、幕末の怪奇趣味に投ずるのみならず、近代の読書子にも愛読者を得ている。泉鏡花は、若菜姫に江戸の美意識としての「張と意気地」を見出して賞賛、また江戸川乱歩も『白縫譚』の板本を愛蔵していた。長編合巻『白縫譚』は、近代以降の怪奇・幻想文学にも水脈を通じていけると言えよう。

鶴見大学図書館には、初編から六十一編までが所蔵される。六十一編の刊行（明治四年）以後、六十二編の刊行までは七年の空白があり、あるいはこれを一つの画期とする意識が存していたか。特に十五編以降は、袋（書袋）に包まれた状態で現存するのが注目される。袋は基本的に早印本にのみ付せられ、なおかつ購入後の開封を前提としているため、残存例自体も稀少性が高いが、とりわけ刊行当時の形態を留めた遺例は貴重である。作品の舞台や場面の一部、あるいは四季の風物などを配した意匠のみならず、精緻な彫摺、鮮やかな色彩も見所である。この時期の合巻は、木版の技術・意匠（デザイン）ともに、造本上一つの頂点に達したとすることができよう。

VI 「開国」・開港と草双紙 ―― 「万国」風俗への窓

21 『弥次北八／横浜久里毛』

中本二編六巻（合一冊）。岳亭春信作。歌川芳幾画。文久元年（1861）刊。江戸・品川屋久助板。縦 17.9、横 11.8 糎。摺付表紙。品川屋久助板の奥目録あり。

22 『弥次北八／横浜久里毛』

中本二編六巻（合一冊）。作者・画工は上記に準ずる。刊記なし。後印本。縦 17.9、横 11.8 糎。摺付表紙。奥目録なし。

展示資料 No.16 でも触れた『道中膝栗毛』の好評は、明治初年に至るまで、後続作・模倣作を次々に生み出していく。弥次郎兵衛・喜多八の珍道中は、東海道に留まらず、木曾街道や日光道中など諸国に及ぶこととなった。本作もそうした「膝栗毛物」の驥尾に付す作例である。

横浜は、ペリー来航以降のいわゆる「開国」政策をうけて新たに開かれた港であり、外国人居留地が置かれたこともあって、世界各国の珍しい文物が集まる地として話題を集めた。弥次喜多の新たな止宿先として選ばれたのも蓋し当然と言えよう。

ただし、（これも弥次喜多物の常道と言えようが）作品の主眼は新開地横浜の風物自体よりも、お馴染み珍道中の滑稽にある。本作でも、横浜への出立前の騒動と、道中の見聞が過半を占めており、新港地横浜の描写は、僅かに後編でなされるに過ぎない。なおかつ、その舞台は主に遊廓

（港崎遊廓）の中に留まっている。横浜ピジンらしき言葉への言及があることを除けば、新開地ならではの新規な見聞はほぼ見られないと言ってよい。むしろ、横浜の目新しさはほどほどに、変わらず馴染み深い弥次喜多の珍道中を描く点に眼目があつたとみるべきか。

鶴見大学図書館には同書目が二点所蔵されるが、奥目録を欠く一点はやや後印本と目される。諸本の検討は未達であるが、明治板の存在も指摘されており、それなりに板を重ねたことが窺える。同年中に第二編も刊行されており、新港地横浜への関心を窺うことができよう。

23 『^{をきなるときばんこくばんし}童絵解万国噺』三・四編

中本二編八巻八冊（合一冊）。全四編中、三・四編存。^{かながきろぶん}仮名垣魯文作。^{よしとら}歌川芳虎画。文久元年（1861）刊。江戸・山田屋庄次郎板。未完。後印本（明治板）。

縦 17.8、横 11.3 糎。青鈍色唐草文様押型表紙。左肩子持梓摺題簽。外題「童絵解万国噺 全」。三・四編の口絵を巻頭にまとめる形で改装。

書名に示される通り、本作は欧米各国の地理や歴史を「童蒙」に挿絵入りで紹介する作として刊行を開始された。初編の自序では、漢語・蘭語の地理書を「^{みくに もじ}皇国仮字に^{ときやわら}解和げ」、海外万里の情勢を紹介する趣旨を述べている。その言に違わず、以下『^{みくに もじ}坤輿図識』などの啓蒙書・地理書に基づいて、「仏蘭西国」「英吉利国」「魯西亜国」（初編）、「北亜墨加合衆国」（二編）の国情を述べていく。歴史や地理、偉人の伝記などを挿絵入りで平易に紹介する筆致は、確かに「童蒙」向けの「万国噺」の名にふさわしいものである。

しかし、三編・四編に至って、その方向性は大きく転回する。三編以降は一応アメリカ初代大統領ワシントンの伝を扱うが、その父は姓をワシントン、名をメリケンといい、英国宮廷に出仕中に女王愛玩の「夜光の玉」を毀損、更に侍女ハリナと密通した廉でアメリカに追放される。彼らの間に生まれた勇猛な男子「ワシントン・ゲオルゲ」は、怪物退治に「かくまく山」へ出かけ、乙女カレルを賊の手中から救い出して、その兄「豪傑フランキリン」と出会う。また四編では、「孝子アダムス」の大蛇退治、ワシントンの虎退治などが語られていく。

上記の通り、ワシントンやフランクリン、アダムスなど、米国独立の英雄たちを登場させてはいるが、その筋立ては「夜光の玉」や大蛇退治など、合巻の常道そのままである。「万国噺」の名を借りて、お定まりの伝奇的趣向を綴っていく態度は、二編までとは一線を画している。

本作の背景には、同時期に盛行した、新開地横浜の風景や外国人の姿などを描く「横浜絵」との関連が指摘されている。作者魯文と芳虎は、横浜絵の第一人者として多作を誇ったコンビでもあった。横浜絵の世界を合巻という器に持ち込んだのが『童絵解万国噺』であったとも言えよう。しかし、合巻として編を重ねる中で、その方向性は早々に手放されることとなった。

本学所蔵本は、表紙や見返・奥付等から、明治板と判断される。本作は、初・二編、三編のみ端本にて伝存する例もあり、流布の様相は単純ではないが、鶴見本の如く、「童絵解万国噺 全」の外題で三・四編のみを合綴した例があることは注目してよいと思われる。「孝子アダムス」の大蛇退治は、草双紙というジャンルの特質とも関わって、いまだ大きな問いを投げかけている。

● 参考文献（主要なもの）

- ・『黄表紙総覧』（棚橋正博編、日本書誌学大系 48、青裳堂書店、1986-2004 年）
- ・『草双紙事典』（叢の会編、東京堂出版、2006 年）
- ・『赤本黒本青本書誌 赤本以前の部』（木村八重子編、日本書誌学大系 95、青裳堂書店、2009 年）
- ・『洒落本大成』（中央公論社、1978-88 年）
- ・『近世子どもの絵本集 江戸篇・上方篇』（岩波書店、1985 年）
- ・『役者合巻集』（佐藤悟校訂、叢書江戸文庫 24、国書刊行会、1990 年）
- ・『山東京伝全集』（ぺりかん社、1992 年-〈刊行中〉）
- ・『修紫田舎源氏』（鈴木重三校注、新 日本古典文学大系 88・89 岩波書店、1995 年）
- ・『白縫譚』（高田衛監修、佐藤至子編・校訂、国書刊行会、2006 年）
- ・水野稔校注『黄表紙 洒落本集』（日本古典文学大系 59、岩波書店、1958 年）
- ・浜田義一郎他校注『黄表紙・川柳・狂歌』（日本古典文学全集 46、小学館、1971 年）
- ・小池正胤他校注『江戸の戯作絵本』全六冊（現代教養文庫、1980～85 年）
- ・水野稔校注『米饅頭始・仕懸文庫・昔話稲妻表紙』（新日本古典文学大系 85、岩波書店、1990）
- ・木村八重子他校注『草双紙集』（新 日本古典文学大系 83、岩波書店、1997 年）
- ・棚橋正博他校注『黄表紙・川柳・狂歌』（新編日本古典文学全集 79、小学館、1999 年）
- ・木村八重子『草双紙の世界 —— 江戸の出版文化』（ぺりかん社、2009 年）
- ・鈴木重三『絵本と浮世絵』（美術出版社、1979 年）
- ・鈴木俊幸『江戸の本づくし——黄表紙で読む江戸出版事情』（平凡社新書 566、2011 年）
- ・佐藤至子『江戸の絵入小説 —— 合巻の世界』（ぺりかん社、2001 年）
- ・青山英正「古典知としての近世観相学」（『アジア遊学 もう一つの古典知』勉誠出版、2012-7 月）
- ・石川了「初代笠亭仙果年譜稿 その一（その二・その三・補遺（上）・補遺（下））」『大妻女子大学文学部紀要』11 号～16 号、1979 年 3 月～1984 年 3 月）。
- ・康志賢「十返舎一九の黄表紙二種試読 — 『聞風耳学問』と『旅恥辱書捨一通』 —」（『文献探求』9 号、九州大学文学部国語国文学研究室内「文献探求の会」発行、1998 年 3 月）
- ・佐藤悟「草双紙とは何か」（『山東京伝奇小説集』月報 4、国書刊行会、2003 年 1 月）
- ・鈴木俊幸「書籍の宇宙」・「草双紙論」（鈴木俊幸編『書籍の宇宙』平凡社、2015 年）
- ・中山右尚「『文武二道万石通』の書誌」（『共立女子短期大学紀要（文科）』20 号、1977 年 3 月）
- ・平田由美「ワシントン豪傑物語」（『人文学報』75 号、1995 年 3 月）
- ・細谷敦仁「〈翻・複〉『福神目出度揃』について」（『叢』13 号、1990 年 7 月）
- ・松原哲子「富川房信著作年表稿」（『実践国文学』61 号、2002 年 3 月）
- ・水野稔「黄表紙における刊年と異版の問題」（水野稔『江戸小説論叢』中央公論社、1974 年）